

紅の引き金

柿の種至上主義

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某有名戦闘機ゲームの主人公の前身は、

某ジブリ最強の飛行機（艇）乗りだった

戦争を生き延びたほどの腕前と経験を持つ彼はどのような影響を及ぼすのか

——カッコイイとはこういうことさ。

目次

スクラップ・クイーン

1

スクラップ・クイーン

あん？あの大馬鹿野郎についてだつて？

別にあんたらが邪推してるような関係では欠片もないから安心しな。

それでも話を聞きたい？ああ分かった、もう降参だよ。・・・と言つても大して面白くもないんだけどね、それにあたしはあの野郎と直接会うつもりなんて最初はなかったんだ。

◆◆

やせつぼちの政治犯野郎から話を聞いてから早数日、例の大馬鹿野郎の機体にちよつとした魔法つてやつをかけてからもあいつは他の懲罰部隊の連中と一緒になつて何度か空に飛んで行き、その度に馬鹿なことをやってのけた上で生きて帰つてきやがつていた。

あたしはいつものように生きて帰つてきたやつらの機体の整備をするためにハンガーに向かった。機体のことを欠片も気にせず飛ばしまつた馬鹿野郎どもは、さて

今回はどんな風に無茶したんだろうかと思いつつ。

ところがハンガーには先約がいやがった。以前からちよくちよく誰かがあたしの庭みたいな場所を勝手に使っていやがるのは気づいていたが、中々に尻尾を掴めていなかったのだ。あたしはできるだけ音を立てないようにハンガーに入っていた。中にいた野郎が着ているのは懲罰部隊の服、まあそれ自体は予想できていた。看守もの中に好き好んで懲罰部隊の機体をいじろうとする奴も、それができるだけの腕をもつ奴もいないのだから。

そいつは機体に集中しているのかこちらに気づいた様子はなく、あたしはこれまで勝手に使っていやがってことの意趣返しの意味も含めて驚かせてやろうと思った。ついでに一言二言の文句も。

だが、そいつは端から気づいていやがったんだ。

「もう来たか、悪いが使わせてもらってるぜ」

聞き慣れた声じゃなかったが機体をいじる手を止めてこつちに振り返ってきた野郎の顔だけは知っていた。声を知らないのも無理はない、一度も話したことはなかったのだから。

「あたしの庭で勝手してやがったのはあんただったか……大馬鹿野郎^{トリガ}」

これが、あたしとあの大馬鹿野郎が初めて会った時だった。

◆◆

「てめえの乗るものことすら知らねえようじゃ、空を一丁前に飛ぶなんて出来ねえの
「^セ」

「へえ、ご立派な考え方だねえ」

機体の整備を終えて、あたしらはちよつとした話をしていた。いい機会ではあるし、この大馬鹿野郎はどんな頭をしているのか興味があつたからだ。以前やせつぼちの政治犯野郎から話を聞いた時にあたしは、『父さんができなかったことをやってのけた奴なんて肌が合いそうにない』なんて思ったもんだが案外そうでもなかつたらしい。成り行きで一緒になつて機体の整備をやつたが、こいつも中々いい腕をしている。操縦の腕だけじゃ、こいつには不十分だつたらしい。

他愛もない世間話からこの場所への愚痴、この大馬鹿野郎がこなしてきた任務、いろ

んなことを話した。そしてしまいには、あたしのこれまでのことまでしゃべっちゃまってた。父さんのこと、じいちゃんのこと。他人にこれまで話したこともないようなことまでしゃべってたのは、単にこの大馬鹿野郎がえらく聞き上手だったからなのか、見た目ではしゃべりたしと同じか少し上くらいなのに戦争を経験した父さんや下手すりゃじいちゃんみたいな年上と話してるとような感覚になるからなのかは、あたしにも分からなかった。人が見た目によらないってのをここぞとばかりに実感したよ。

そしてあたしは、“空の色”についてあいつに聞いてみた。一切合切しゃべっちゃまったんだし、それくらい聞いとかなきゃ割に合わないと思ってるね。そしたらあいつは、

「空の色、ダークブルー、ね。なるほどな、中々ロマンチストじゃねえか。」

「そう言うのはいい、さっさと答えな」

そこからあの野郎が話し出したのは、どこかの海の上で戦い、戦友も親友も失ってしまった一人生き残った男の話だった。そしてその話の中に出てくる、空のどこかに存在しているかもしれない、雲の平原。

あたしにはなぜだかその風景が鮮明に浮かんできていた。見渡す限りの真つ白な平

原。自分の乗っている機体のエンジン音すら聞こえない静寂。自分のいる場所からさらに高い、あたしの言うダークブルーの入り口辺りに流れている一本の不思議な雲。

奴はこうも言っていた

「あの時のことだけは、死んでも忘れられねえさ」

その一言がなぜか妙な重みを持っていた。



あの大馬鹿野郎との話から数日後、あいつが他の懲罰部隊の馬鹿どもと駄弁つてるのを見つけた。と言つても、あいつは他の奴らの話を聞いているのがほとんどだったが。操縦の腕はいいんだが手癖の悪い奴、博打しか頭のない馬鹿、根性なくせに政治犯気取りの奴。

意外な連中があいつの周りにいやがった。変わった奴らに気に入られてると思つたが、どうやら何度か奴のおかげで命拾いした奴らばかりらしい。

「僕らはみんなトリガーに助けられたからこそ、今ここに居るのさ。そりやマジで死ぬんじゃないかって場所に連れてかれたこともあるけどそれはそれ。それ以上に助けられてるのさ。ハイローラー、チャンプ、フルバンド、口では何だかんだ言ってるが、少

なからずみんなトリガーに感謝してるのさ。もちろん僕もね」

後になってからやせつぼちの政治犯野郎が、妙に得意げになってそんなことを話していた。そんな奴らの話の話題はちょうどあたスクラップ・クイーンしのことになっていたみたいだ。酒でも入っているのか、馬鹿みたいに大声で話すもんだからあつちが気づかない距離からでも十分聞こえてきた。

やれ、挨拶一つ返さないだとか

やれ、女王様を気取ってやがるだとか

やれ、女のくせに生意気だとか

しょうもないことばかり。

いつものように聞かなかつたことにしてそこをさつきと離れようと思った矢先に、聞き役だったあいつがしゃべりだした。

「あいつはただの女なんかじゃねえさ。スクラップ機から俺たちの乗れる機体を作り上げたんだ。タブロイドの言葉で言えば魔法みたいにな。ちいとばかし若い、いい腕してるぜ」

「えらくクイーンの肩を持つじゃないかトリガー、さしずめ騎士さまってところか」

「そう言う考えにすぐいつちまう辺りがまだまだ若い証拠なんだよ」

「まあまあ、トリガーからしてみれば僕ら全員まだまだ小童なのは間違いないさ」

「俺が乗る機体も、前よりずっと良くしてくれたんだ。もうちつとばかり丁重にしても罰は当たんねえだろ」

「ほんとかよ？でたらめ言ってるじゃねえだろうな」

「飛行機やら戦闘機、飛行船に関しちや嘘は言わねえさ」

あいつの言葉が妙にこそばゆかった。

よく見ればあいつはえらく煙草を吸っていた。その場にいた誰よりも。思い返せば、あいつが使ってた時のハンガーの入り口近くには灰皿に小さな山が出来ていたし、あいつからも煙草のにおいはしたが、あたしと話していた時は一本も吸っていなかった。

今までされたことのないような気遣いや褒め言葉がどうにもどうしようもなくこそばゆくて、

正直今でさえまだ慣れちゃいない。

◆◆

あん？結局のところどうなのかって？別に変わりはないさ、

あたしは今もあの真つ赤な趣味のいいとは言えない機体でどっかの空を飛んでいる
だろう大馬鹿野郎のことをちよつと離れたところから見守るだけだ。

・・まあでも、いい酒が手に入った時くらい二人で飲むってのも悪くはないかもね。